

## ～ 図書館にある自然災害の記録 ～

昨年の東日本大震災後、被害状況から災害に対する我が国の対応について様々な検証が行われています。その中でも、過去の自然災害の記録から、当時の周辺環境や被害の状況、人々の対応等を調べ、今後の災害の予測や防災のデータにしようとする「地震考古学」は一つの例でしょう。

現在と比較すると記録の媒体や方法等では劣る部分もあるとはいえ、詳細に記録されている古文書や絵図などからは、逆に当時の被害の大きさが生々しく伝わってきます。

本館郷土資料室にある『宮崎県災異誌』（宮崎県 1967）には、こうした有史以来本県が遭遇した様々な災害の記録がまとめられています。たとえば、大宝3年（703）に「本県地域は干ばつによる凶作のため、租調といった税収が半減した。」とあり、仁和3年（887）は「大地震と洪水のため、臼杵郡東海村（現在の延岡市北部）護国山慈通寺流失す。」とあります。多くの人々が甚大な被害に打ちひしがれていたであろう中、被害の状況もしっかりと記録されていたわけです。そして今でも私たちはその記録を今後の教訓として生かすことが出来るのです。

その他、本館が管理している自然災害に関する資料の一部をご紹介します。

まず、「元禄二年（1689）日向国那珂郡南方村絵図」（本館寄託「嶮南文庫」）です。

寛文2年（1662）に発生した「外所（とんどころ）地震」によって、県沿岸部は多大な被害を受けました。特に、那珂郡の南方村沿岸部の一部（現在の加江田川河口あたり）が陥没して、大きな入江になったことがこの地図にあらわされています。

当時の地震の状況については、飢肥藩家老であった平部嶮南（1815～1890）は、著書『日向地誌』の中で次のように述べています。「寛文二年九月十九日の夜子の刻、日向国大いに震し、且つ津波俄かに来りて那珂郡の内下加江田北郷所々の地陥って海となること周囲七里三十五町、田畑八千五百石余、米粟二千三百五十石余流失あり・・・外諸土屋敷土蔵石垣等の破損勝て数ふるに違あらず。誠に未曾有の大災なり」



【日向国那珂郡南方村絵図】



【『伊東志摩守日記』より富士山宝永噴火図】

次にご紹介するのは、やはり本館が管理する『伊東志摩守日記』です。著者である伊東志摩守祐賢（すけかた）は飢肥藩主伊東氏の親戚にあたる旗本でした。日記は江戸にいた祐賢が、富士山噴火の状況を記録し、飢肥藩へ送ったものといわれています。特にこの日記は、宝永年間に起きた富士山の大噴火の状況を詳細に記録した史料として全国的にも有名です。日記の中の富士山噴火の絵図は、文章とともに噴火地点などがかなり正確に描かれていることが、最近の検証により明らかになりました。〔詳しくは本館所蔵『富士山噴火とハザードマップ』（小山真人 2009 古今書院）をご覧ください。〕

今回ご紹介した資料は、全国的に防災への関心の高まる中、県内外の研究機関やマスコミなどから、防災関連の番組や刊行物への掲載資料にという希望が相次いでいます。最新のテクノロジーによって、あらゆる事が科学的に検証、予想できるようになった現在でも、先達の教えは私たちの生活に大きな影響を与えているのです。